

武蔵野日曜集会

信仰の本質

――ロマ書第1章1～17節――

1996年3月10日(武蔵野)

小池辰雄

選びの器 与える義 信仰の本質 生活そのものが証し キリストは大変なひと 根源現実
地上にありながら天国人

【ロマ1:1～17】

1 キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選^{あらかじ}び別たれたるパウロ――2 この福音は神その預言者たちにより、聖書の中に預^めめ御子に就きて約し給いしものなり。3 御子は肉によれば、ダビデの裔^{すえ}より生れ、⁴ 潔き霊によれば、死人の復活により大能をもて神の子と定められ給えり、即ち我らの主イエス・キリストなり。

5 我等その御名^{みな}の為にもろもろの国人^{くにびと}を信仰に従順ならしめんとて、彼より恩恵^{めぐみ}と使徒^{つとめ}の職^{つとめ}とを受けたり。6 汝等もその中にありてイエス・キリストの有^{もの}とならん為に召されたるなり――7 われ書^{ふみ}をロマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒となりたる凡^{すべ}ての者に贈る。願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

8 汝らの信仰、全世界に言い伝えられたれば、我まず汝ら一同の為にイエス・キリストによりて我が神に感謝す。9 その御子の福音に於て我が霊をもて事^{つか}うる神は、わが絶えず祈^{みち}のうちに汝らを覚え、10 如何にしてか御意^{みこころ}に適^{かな}い、いつか汝らに到るべき途^{みち}を得んと、常に冀^{こいね}がうことを我がために証し給うなり。11 われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅^{かち}うせられん為に霊^{たまもの}の賜物を分け与えんとてなり。12 即ち我なんじらの中にありて互いの信仰により相共に慰められん為なり。13 兄弟よ、我ほかの異邦人の中より得しごとく汝らの中よりも実を得んとてしばしば汝らに往かんとしたれど、今に至りてなお妨げらる、此の事を汝らの知らざるを欲せず。14 我はギリシヤ人にも夷人^{えびす}にも智^{かしこ}き者にも愚かなる者にも負債^{おいめ}あり。15 この故に我はロマに在る汝らにも福音を宣伝えんことを頻^{しき}りに願うなり。16 我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡^{すべ}て信ずる者に救を得さする神の力たればなり。17 神の義はその福音のうちに顕^{あらわ}れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。



録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

● 選びの器

今まで福音書がだいぶ長かったので、今日からローマ書をやることにいたしました。これは続けていきます。今日はローマ書の1章1節から17節までです。

使徒行伝の9章を開いてください。「サウロ」というのはパウロの前のユダヤ的な名前です。彼はギリキヤのタルソで生まれ、エルサレムでガマリエルという人に学び、ギリシヤ的な知識とユダヤの旧約の信仰と両方とも持っている非常にインテリの優れた人なんです。

「サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝と殺害との気を充たし、恐ろしいですね、

大祭司にいたりて、²ダマスコにある諸会堂への添書を請う。この道の者を

見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳かん為なり。³往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照らしたれば、

⁴かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」と言われた。「我を」というのは、キリスト自身と自分を信ずる者全部を入れて、「我を」と言っておられるわけです。これはもちろん、霊体をもっているキリスト、いわゆる復活のキリストの声です。「復活」という言葉は、息を吹き返してまた生き返ったという感じを受ける言葉なので、私はあまり好きではない。パウロがコリント前書15章で「霊体」のことを言ってますけれども、新しい霊的な体、霊体をもって現れたのがこの復活のキリストなんです。

⁵彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。

⁶起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』⁷同行の人々、物言

うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。⁸サウロ地より起きて目をあけたれど何をも見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、⁹三日のあいだ見えず、また飲食せざりき。

これは非常な、大きなショックですね。

¹⁰さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、ちゃんとアナニヤに示されているんです。

幻影のうちに主い給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』
「はいっ」ということを「我ここに在り」という言い方をする。

¹¹主い給う『起きて直という街にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。』¹²又アナニヤという人の入り来たりて再び見ゆることを得しめんがために、手を己がうえに按くを見たり』¹³アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサ



レムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14 また此処にても凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』15 主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに我が名を持ちゆく我が選びの器なり。』

主のえらい言葉を聞いてしまったわけです。もともとキリストに逆らっているような男だったのを、ひっくり返されてしまったわけです。「選びの器だ」という。

16 我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』17 ここにアナニヤ往きてその家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主、即ち汝が来る途にて現れ給いしイエス、われを遣し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』

ここに特に「聖霊」という言葉が書いてある。

18 直ちに彼の目より鱗のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、かつ食事して力づきたり。

19 サウロは数日の間ダマスコの弟子たちと偕におり、20 直ちに諸会堂にて、イエスの神の子なることを宣べたり。21 聞く者みな驚きて言う『こはエルサレムにて此の名をよぶ者を害いし人ならずや、又ここに来りしも之を縛りて祭司長らの許に曳きゆかんが為ならずや』22 サウロますます能力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。

サウロはすっかり変わってしまったているから、全然別ですよ。

23 日を経ること久しくして後、ユダヤ人かれを殺さんと相謀りたれど、相変わらずそうだと思つて殺そうと思つた。

24 その計略サウロに知らる。斯て彼らはサウロを殺さんとして昼も夜も町の門を守りしに、25 その弟子ら夜中かれを籃にて石垣よりつり下ろせり。

おもしろいね。

26 ここにサウロ、エルサレムに到りて弟子たちの中に列らんとすれど、皆かれが弟子たるを信ぜずして懼れたり。

とんでもないやつがやって来た、というわけです。

27 然るにバルナバ彼を迎えて使徒たちの許に伴いゆき、その途にて主を見しこと、主の之に物言ひ給いしこと、又ダマスコにてイエスの名のために隠せず語りし事などを具に告ぐ。28 ここにサウロはエルサレムにて弟子たちと共に出入りし、29 主の御名のために隠せずして語り、又ギリシヤ語のユダヤ人と、かつ語り、かつ論じたれば、彼等これを殺さんと謀りしに、30 兄弟たち知りて彼をカイザリヤに伴い下り、タルソに往かしめたり。



31 斯てユダヤ、ガリラヤ及びサマリヤを通じて、教会は平安を得、ややに堅立^{けんりつ}し、主を畏^{おそ}れて歩み、聖霊の祐助^{たすけ}によりて人数いや増せり。」(使徒9:1-31)

彼は完全にクリスチャンとしての伝道が始まった。そういう大変化を起こした。迫害しようと思ったら、復活のキリストにやつつけられて、そしてそこでもって完全にキリスト者に変わってしまった。そういうことがこの使徒行伝9章に出ているわけです。

●与える義

ローマ書というのは新約聖書の、福音の中心みたいな所です。ローマは当時の世界的な大都市ですから、パウロもローマに伝道しなくてはいかんと、それからイスパニヤの方に向かおうと、そう思っていたわけです。行く前にローマへの手紙を書いた。それがローマ書です。

1 キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選り別たれたるパウロ――

パウロはキリストの第一使徒だ。彼は直弟子ではない。ペテロやヤコブやヨハネというのは直弟子ですけれども。地上のキリストはパウロを知らない。ところが、パウロは一番の選り別の器になってしまった。

2 この福音は神その預言者たちにより、

旧約の預言者ですね、アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤというような連中です。

聖書の中に預^{あらかじ}め御子^{みこ}に就きて約し給いしものなり。3 御子は肉によれば、ダ

ビデの裔^{すえ}より生れ、

人間的な意味ではダビデの系統だけれども、お父さんのヨセフはなんにもキリストを生んだのではない。妻のマリヤは聖霊によつてキリストを生んだのですから、キリストの生れ方は全然別なんです。「一般的な意味では」というのが、この「肉よれば」という言い方です。

4 潔^{きよ}き霊によれば、死人の復活^{よみがえり}により大能をもて神の子と定められ給えり、

キリストは十字架の死を遂げてから復活して、霊的な存在となつて、そして、神の子と定められた。

5 我等その御名^{みな}の為にもろもろの国人^{くにびと}を信仰に従順ならしめんとて、彼より恩恵^{めぐみ}と使徒の職^{つとめ}とを受けたり。

この「恩恵」というのは、神・キリストの生命、光、力、それを恩恵という。

6 汝等もその中にありてイエス・キリストの有^{もの}とならん為に召されたるなり

――7 われ書^{ふみ}をローマに在りて神に愛せられ、召されて聖徒^{すべ}となりたる凡ての者に贈る。

これが「ローマ書」だということ。



願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

「恩恵と平安」という言い方がよく出てきます。恵みが本来に來ると、そこに平安がある。恵みがない所には平安はない。神さまの力、生命、光が恵みですから、そこに平安があるわけです。この「平安(シャーローム)」は平和とは違います。

8 汝らの信仰、全世界に言い伝えられたれば、我まず汝ら一同の為にイエス・キリストによりて我が神に感謝す。9 その御子の福音に於て我が霊をもて事うる神は、わが絶えず祈のうちに汝らを覚え、10 如何にしてか御意に適い、いつか汝らに到るべき途を得んと、常に冀がうことを我がために証し給うなり。

本当に君たちに会いたい。これには目的があるわけです。

11 われ汝らを見んことを切に望むは、汝らの堅うせられん為に霊の賜物を分け与えんとてなり。

聖霊の賜物です。聖霊という賜物です。聖霊が即ち賜物なんです。

12 即ち我なんじらの中にありて互いの信仰により相共に慰められん為なり。

13 兄弟よ、我ほかの異邦人の中より得しごとく汝らの中よりも実を得んとてしばしば汝らに往かんとしたれど、今に至りてなお妨げらる、此の事を汝らの知らざるを欲せず。14 我はギリシヤ人にも夷人にも智き者にも愚かなる者にも負債あり。15 この故に我はロマに在る汝らにも福音を宣伝えんことを頻りに願うなり。16 我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信する者に救を得さする神の力たればなり。17 神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

この17節は非常に著しい言葉です。

「神の義はその福音のうちに現れた」

という。「義」というのは、旧約の方では、人を審くような角度が多いわけです。預言者においてはそうでないところもありますけれども。これは審く義ではなくて、与える義なんです。

「義人は信仰によりて生くる」

というのはルターが好きな言葉です。これは

「信仰によって生くるのは義人だ」

とむしろ逆なんです。ハバクク書2章に、

「視よ彼の心は高ぶりその中にありて直からず、然れど義しき者はその信仰によりて活くべし。」(ハバクク2:4)



とある。

●信仰の本質

今日の主題に「信仰の本質」と書いた。私は無教会のメンバーだった時に、

「大事なものは信仰だ、行為ではない。行為を一生懸命でやっているのはカトリックで、プロテスタントは信仰が大事だ」

と、信仰のことを散々言われた。ところが、信仰となると、

「私の信仰はどうだろうか、君の信仰はどうだ」

と、自他の信仰の論評なんかを始める。本当はこれほとんどもないことです。信仰はサムシングではない。私は「信仰」とは書かない。「神交」と書く。活ける神はイエス・キリストです。キリストの中に自分を投げ入れる。投身する。あるがままの自分をキリストの中に投げ入れるんです。キリストは神さまの懷の中におられた。

「我を見し者は父を見しなり」

「我と父とは一つなり」

と仰った。神さまと自分は一つだから、私を見た者は神さまを見たことになる。キリストは神さまの現象体です。キリストは正に神交者です。神と靈的な交わりをしているひとなんです、神の懷の中にいるんだから。我々は神さまと直接はだめですから、贖い主キリストと靈的な交わりをする。キリストは我々を贖ってくださいました。過去・現在・未来の自分を完全に贖い切ってしまったている。

昔はこちら側の信仰、人間の側の信仰なんていうものを散々問題にしていた。今でも、キリスト教界では信仰を問題にするでしょうね。けれども、私はもう信仰なんか問題にしない。私は

「自分の信仰なんかありません。キリストに圧倒されているだけです」

とはつきり言います。何も無い。キリストに圧倒されている。キリストの中に自分を投げ入れるだけです。これが本当の神交なんです。「主さま！」とはらわたの奥で叫べば、叫ぶと同時にキリストの中に入ってしまう。そうすると、あとはもう祈ることはなくなってしまう。祈りは「アーメン、ハレルヤー！」だけ。祈りは

「主さま！ アーメン、ハレルヤー！」

と、簡単なんです。それから何かお願いしたいことがあったら、お願いしたらいい。お願いすることは、「キリストの故に、福音の故に」の性格をもっていないようなお願いは、私利私欲のお願いは、「そんなものは聞かないぞ」と、全部否定されてしまう。本当の願いは、

「福音のために、この福音を人に伝えざるを得ない」

ということ。仏教の世界でいうと、法然や親鸞がそういう角度の信仰をもっていた。本当に人が救われるためには



「自分は地獄に落ちたって構わないんだ」
と親鸞が言っている。

キリストの中に投身する。

「主さま！」

と叫べば、叫びと共に同時にキリストの中に自分を入れてしまう。そしてあとは何かという、「アーメン、ハレルヤ！」しかない。「ありがとうございます！」と平伏ひれふだけです。平伏して、「主さま」と言つて、あとは「アーメン、ハレルヤ」です。全部、キリストは上からの御意で聖力で恵みで圧倒してくださる。キリストに圧倒されて生きている。自分の信仰なんかありません。信仰そのものを問題にして、何のかんの言っているのはご苦勞さんな話で、くたびれてしまう。キリストの中に投身すると、神交かみまじり、という上からの恵みの力がやってくる。これが本当の神交になる。

「こういう人間だから、救われるか、また救われないか」

なんていうことではない。万人を、誰であろうとも、キリストは救おうとしていらつしやる。そのキリストの恵みを、キリストの救いの御意をみんな拒んでいるんだ、

「それでも私はこうです」

なんて。「それでも」も何もありはしない。

「まだ信仰が本ものでありませんから」

なんて言う必要もない。空っぽでいい。あるがまま自分をキリストの中に投身するだけ。だから、「主さま！」と言つて、キリストの中へ自分を入れてしまう。そうすると、

「ありがとうございます！」

と、あとは感謝と讃美だけです。これは本当に簡単でいいね。

「主さま！ アーメン、ハレルヤ！」

だけ。キリストが善きように、その人にふさわしいように導いてくださる、助けてくださる、力を与えてくださる、愛を与えてくださる。それはみな、その人のためではない。その人を通して人を救わんがためです。人を助けんがため、福音が伝わらんがためにです。我々はその門口かどぐちになるわけです。「私は救われました」なんて言つて、いい気になっているのはひとつも救いではない。我々が救われることは、人を救わんがために、人に福音を伝えるがためにです。それが本当の証し人、キリストの証者です。キリストの福音を人に伝えることが証しということですよ。

●生活そのものが証し

キリストは

「我を見し者は父を見しなり」

と仰つた。キリストは自分はゼロなんだ。そうすると、父という無限大がキリストの中に



入ってきている。

「我なに^なごとをも為しあ^なたわ^なず」

と仰った。

「私は何も言えないし、何も出来ない。ただ神さまの言えということを書いて
いるだけだ、為せということ^なを神の力でやっているだけの^なはなしだ」

ということ^なです。

「イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを
見て行^なうほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく
為すなり。』(ヨハネ5・19)」

「我みずから何事をもなし^{あた}能^{あた}わず、ただ聞くままに審^みくなり。わが審^みきは正し、
それは我が意^{こころ}を求めずして、我を遣^{つか}し給^あいし者の御意^{みこころ}を求むるに^よ因る。」(ヨ
ハネ5・30)

裁きでも恵みでもみなそうなんだ。

「自分は何もできない、自分は何ものでもない」

ということ^なです。「信じ仰ぐ」ではなくて、投身してキリストの中に入ってしまう。だから、
力がきてしょうがない、ありがたくてしょうがない。キリストに祈り入って、キリストか
ら力と御意をいただいて、それを人に証し、人助けをする。人助けのできないのはクリス
チャンではないということになるわけです。

賀川豊彦という人は本当にそのような人助けをしたひとです。私は近代のキリスト教の
世界では賀川さんを最も尊敬しています。あの人は本当にキリストの僕ですね。私が育つ
た無教会の内村鑑三の流れはとかく言葉が多すぎる。観念的なんだ。「行為ではない、信仰だ」
と言って、信仰がサムシング(何ものか)になっている。そうではないんだ。生活そのもの
が証しでなければだめなんだ。

イザヤ書9章に素晴らしい言葉がある。

「7その政事^{まつりごと}と平和とはましくわわりて窮^{かき}りなし。且つダビデの位にすわりて
その国をおさめ、今よりのちとこしえに公平と正義とをもてこれを保ちたま
わん。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。」(イザヤ9・7)

「熱心」というのは愛と同じ言葉です。だから、キリストがやってくたさる。

「キリストがやってくたさる」

とは、傍観しているのではない。「自分を通して為したもう」ということです。だから、

「私の中のキリストが見えないか」

と、あなた方一人一人が言えなくては。何も言う必要はないけれども、そういう気持ちで
いないとね。ただ信じ仰いだってだめなんだ。神との交わり、キリストとの交わり、これ
が神交です。キリストは、



「我を見し者は父を見しなり」

と言う。我々は

「我を見し者はキリストを見しなり」

ということにならなくては。それがキリストの証人^{あかしびと}ということですよ。あなた方一人一人がそういった、キリストの出店になる。それは「主さま!」という一言が祈りであり、その祈りと共にキリストが入ってくくださる。そして、その時に必要なことをさせてくださる。

●キリストは大変なひと

ヨハネ伝6章53節、

「53 イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食^{くら}わず、その血を飲まずば、汝らに生命^{いのち}なし。54 わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠^{とこしえ}の生命をもつ、われ終の日にこれを甦^{よみが}えらすべし。55 それわが肉は真^{まこと}の食物、わが血は真の飲物なり。56 わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。』(ヨハネ6・53～56)

こんな素晴らしいことをキリストは言っている。霊的な内容のことを、こういった普通の言葉で、普通の現象でもって言ってらっしゃるわけです。

十字架にかかったキリストは三日目には甦^{よみが}えった。ルカ伝24章19節、

「19 イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神^{すべ}と凡ての民との前にて業^{わざ}にも言^{ことば}にも能力^{ちから}ある預言者なりしに、20 祭司長ら及び我が司^{つかさ}らは、死罪に定めんとて之を付^{わた}し遂に十字架につけたり。21 我等はイスラエルを贖^{あがな}うべき者は、この人なりと望みいたり、然^{しか}のみならず此の事の有りしより、今日のはや三日めなるが、22 なお我等のうちの或女^{ある}たち、我らを驚かせり、即ち彼らの朝夙^{はや}く墓に往きたるに、23 屍体^{しかばね}を見ずして帰り、かつ御使^{みつかい}たち現れてイエスは活き給うと告げたりと言う。24 我らの朋輩^{ともがら}の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』25 イエス言い給う『ああ愚かにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍^{みどろ}き者よ。26 キリストは必ず此^{これ}らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』(ルカ24・19～26)

復活のキリストが現れて、こういうことを仰った。ずっといろいろなことを語ったことが書いてある。そしてパンをとって食べた。ルカ伝24章はおもしろいところだね。復活のキリストが現れて、

「お魚があつたら食べるぞ」

と言って食べた。驚いたね。とにかく普通の常識で考えられないことを霊的な力でするから。

「36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、『平安なんじらに在れ』と言



い給う。37 かれら怖じ懼れて見る所のものを霊ならんと思ひしに、38 イエス言
い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、39 我が手わが足
を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、
汝らの見るごとし』40 斯く言いて手と足を示し給う。41 かれら歡喜の余りに信
ぜずして怪しめる時、イエス言ひ給う『此処に何か食物あるか』42 かれら炙
りたる魚一片を捧げたれば、43 之を取り、その前にて食し給えり。』(ルカ24・

36～43)

復活のキリストがお魚を食べたよ。

キリストは湖の上を渡って行ったり、物理法則を超えてしまう。大変なひとだね。私は、キリストとはどういう人かというと、ただ一言で、

「キリストは大変なひとです」

と言います。キリストの真似なんかしたら溺れてしまうよ。絶対に真似なんかしてはいけない。ただ、そういった霊的なもの凄い現実、力が――これは本当にキリストの中に祈り入ると、なんだか知らないけれども――その人にふさわしい、いまだかつてなかったような事が起きてくる。それは正に神交、神さまとの交わりの世界です。霊的な交わりの世界に入る。神との霊的な交わりの世界に自分を投げ入れる。いわゆる信じ仰いでいたってだめなんだ、入っていかなくては。投身しなくては。

眼光紙背に徹するという、文字の奥の本当の現実を、読みながらつかまえていかなくては。また、つかまえられていかななくては。

「48 汝らは此等のことの証人なり。49 視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ」(ルカ24・48～49)

そして、祈り待っていたら、聖霊の降臨がやってきた。いわゆるペンテコステです。

使徒行伝9章は短いけれども大事な所です。パウロは三日三晩、何も見えず、飲み食いできなかった。アナニヤに按手されて、新しく立ち上がった。

「目より鱗のぶるときもの落ちたり」

とある。復活のキリストにひっくり返された。こういう所は驚嘆驚倒して平伏して読まなければだめです。意味を考えているのではなく、我々は読みながらその現実に入れているのかとね。自分がパウロになり、ヨハネになりということ。読みながら、自分が聖書の中の証人の人物になっていくわけです。全くパウロは選定の器です。

●根源現実

ローマ書1章にもどります。16節に、

16 我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さする神の力たればなり。



「ギリシヤ人」というのは「他のどこの国の人」と同じことです。

17 神の義はその福音のうちに顕^{あらわ}れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録^{しる}して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し。

神交によつてキリストを受けとつて、神交わりによつて生きるのが「義人」なので、「義人」はむしろ説明語になつていいわけです。神・キリストの中に自分を投げ入れていくと、それが義人なんです。そういうようにして生きるのが、この神交によつて生きる者が義人なんだ。始めから義人なのではない。「義人」は主語ではなく、述語なんだ。「神交によつて生きる者」が主語で、それが「義人」です。

11節の「霊の賜物」とは「聖霊^{たまもの}という賜物^{カリスマ}」です。聖霊即賜物です。我々は聖霊を受けとる前には、もちろんキリストの十字架を受けとらないとね。パウロが

「われキリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず」と言つた。

「キリストと共に十字架されたり」

というのが十字架の受けとりです。贖罪です。我々の過去・現在・未来の罪、自我は全部贖われてしまった。

「もう相対的な現実なんか問題にするな」

と。根源の現実はどうゼロなんだ。ゼロにされている。無なんです。無我、我が無い。我が無いのは、これは罪からはずされている。だから、「無者」なんです。無者の最たる者はイエス・キリストです。彼は本当の無者です。神一切だから。

「我を見し者は父を見しなり」

と言つた。我々は

「我を見し者はキリストを見しなり」

と無条件には言えない。無条件に言えるのはキリストだけです。キリストは罪がないから、自我がないから。ところが、我々の中には自我というやつがある。けれども、根源的には、根源現実としては、無者にされているわけです。相対的人間小池はだめだけれども、根源の贖われたる私は無者なんだ。キリストの無者です。あなた方一人一人がそうなんだ。そういう根源現実を本当に持つてないといふ。持つてないと本当の「神交」ではなくなつてしまふ、いわゆる「信仰」になつてしまふ。

「私なんかありませんよ」

とはつきり言えないとね。けれども、他の人たちは「でも、私はあるではないか」という。

「ああ私は相対的にはあるでしょう。けれども、本当の現実、根源の現実、私なんかありません。グーツとキリストの力がきています」

と言える。それが根源現実です。根源現実をいただいてみると、これが本当の無我者、無者なんです。そこにはキリストが来ている。無即無限無量なんです。キリストは自分がな



いから、

「我を見し者は無限無量なる父を見しなり」

ということになる。無限無量なるキリストです。だから、私たちはそれを本当に平伏して感謝して、「主さま！」と一言、言えばグーッと上からキリストがくる。疲れを知らない人になる。

●地上にありながら天国人

いわゆる聖書研究や、いわゆる信仰でもってやっていけば、それはくたびれますよ。ところが、私みたいに「何もありません」とやっている、疲れない。こうやってあなた方に話していると、終りになるほど私は力が入っている。集会をやると、あとは力が来てありがたくてしょうがない。さっぱり疲れない。疲れるどころでなく、逆に力がきてしまう。あなた方も、聞きながらそうですね。そういうのがこの武蔵野集会の生命だから。語るも聞くも同じこと、上から力がきてしょうがない。終りになればなるほど声が大きくなったりする。イザヤ書40章に、

「然^{まづ}はあれどもエホバを俟望^{あたら}むものは新なる力をえん。また鷺のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず、歩めども^{うま}倦^うざるべし。」(イザヤ40・31)

とある。「待ち望む」というのは、待つて望むということではなく、信頼するということです。その「信頼する」という言葉のことは「帰っていく」「シューブ」というヘブライ語です。

「神さまに帰りゆく者は新たなる力をえん」

ということ。 「帰り行け」という時には「シューバー」という。

「キリストの所に帰って行きなさいよ」

ということ。私はキリストの所に帰って行くと、直ちに力が来てしょうがありません。霊の世界というのはそういうものだからね。

「キリストは一人だから、みんなが帰り入ったら、キリストは困りはしないか」

なんて、そんな考え方はいらない。霊の世界というのはそんなものではない。

我々の日常生活ではいろいろな事が起きるね。けれども、どんなことが起きても、どんな現情になっても、神讚美が大事です。神を讚美する、キリストを讚美する。讚美することが一切である。感謝して御名を讚える。くすぶらない。クリスチャンで、くすぶった顔してたらだめなんだ。しょっちゅう笑ってなければ。

「どうなったって差し支えないんですよ、私の中には天国がきてますから」

と。みな天国人なんだ。地上にありながら、天国人なんです。

